

「空気」に関する論考(2) : 日本文化を規定するモノ

江村, 裕文 / EMURA, Hirofumi

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

134

(終了ページ / End Page)

154

(発行年 / Year)

2019-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021675>

〔論文〕

「空気」に関する論考 II

— 日本文化を規定するモノ —

On Japanese “Mood” II

— What makes Japanese Culture to be Japanese Culture —

江村裕文

EMURA Hirofumi

【キーワード】

言霊 集団主義 配慮 察し 気遣い

0 はじめに

江村 (2016) 「空気に関する論考 I」では、「KY」という表現、辞書にみられる「空気」の意味記述、山本七平氏の「空気論」、森有正の「二項関係論」等に触れた。①

その後も、『朝日新聞』に以下のような記事が載るなど、「空気」はその力をいささかも弱めてはいないようだ。『朝日新聞』2013年4月29日版の38ページ、「敵がいる」というコラムのタイトルはまさに「訪朝公演「空気読んどらん」」である。②

3月5日、石川県議会の自民党役員室。紐野義昭・県議会幹事長（57）がつぶやいた。
「空気読んどらん」

同席した議員4人が続いた。「見過ごせん」「止めたもんはいなかったのか」

前日の新聞記事。オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）音楽監督、井上道義さん（66）の北朝鮮入りを伝えていた。

（中略）「社会の常識から逸脱した異常な行動」「北朝鮮の広告塔としての発言をさせてはならない」。

（中略）知事が言った。「監督としての立場を十分考え、自重していただくようお願いしたい」

□ □

4月20日、東京・渋谷のミニシアター。公開初日の様子を見届ける李鳳宇（リボンウ）さん（52）の姿があった。（中略）

李さんは数々の韓国映画を配給してきた。「シュリ」や「JSA」は北朝鮮が前面にでてくる。在日朝鮮人が主人公の作品も手がけた。批判や中傷もあった。

「それでも『二分（にぶ）』は残しておこうという余裕が10年前はまだあった。

「村八分」でさえ生ぬるい。李さんはそんな空気を感じている。②

ここでは、北朝鮮に関連する問題に対して、日本人全体があまり友好的ではない雰囲気

ある、ということの説明として「空気」が使用されている。

本稿では、以下、「1」で様々な論者によって「空気」がどのように指摘されているか見ていく。その後、「2」で最近の「空気」論の実例をいくつか紹介し、「3」でまとめとする。

〔注〕

- ① 江村（2016）
- ② 『朝日新聞』2013年4月29日版

1 様々な論者の「空気」論

ここでは、まず最近の議論として「1. 1」で古賀茂明氏の「空気」に関する議論を取り上げる。以降ほぼ歴史的に古い順に、「1. 2」では「察し」や「思いやり」に注目している会田雄次氏の「察し」の議論、「1. 3」では日本語の堪能な外国人、ハルペン・ジャック氏の「空気論」に関する指摘を取り上げる。「1. 4」では異文化間コミュニケーションの直塚玲子氏の「場面依存性」および「察し」論について、「1. 5」では言語学の立場から池上嘉彦氏の「状況論」を取り上げる。「1. 6」では、「言霊」の観点から日本人論を展開している井沢元彦氏の「言霊」論を参照する。以上のまとめとして、「1. 7」では、『「関係の空気」「場の空気」』を書いた冷泉彰彦氏の「空気論」、「1. 8」では『「空気」の構造』を書いた池田信夫氏の「空気論」を紹介する。

1. 1 古賀茂明氏の「空気」論

古賀茂明氏も『官僚の責任』の中で、「空気」に関する事例を書いている。①

1990年代のことだが、当時の通産省が「財団法人日本資産流動化研究所」という団体を設立し、リース会社やクレジット会社の審査業務を委託することになった。通産省からそこへ理事長や事務局長を送り込むことが可能な天下りポストの誕生である。

しばらくして古賀氏が商務情報政策局の取引信用課長としてこの事業を担当することになったときには、事業は安定してまわっており、かつ流動化の仕組みも市場での理解が進んでいたため、古賀氏が「もう規制をはずしてもいいのでは」と提案したのだが、規制撤廃は容易には進まなかったという。

規制を撤廃しても差し支えないこと、撤廃したほうが取引が活性化し、業界ひいては金融業界にとってもプラス効果大きいことはみんなわかっている。けれども規制を撤廃したら、審査を行っていた団体も不要になり、天下りしているOBが職を失ってしまう。大勢がそういう考えだったという。

「官僚の世界では、先輩に不利益になることを言い出すこと自体がタブーだ」と古賀氏は指摘し、「こういう雰囲気は、経産省のみならず各省庁にいまも「気分」として流れている。」②と書いている。まさしく日本的な「空気」が支配していて、正論が通じない実例である。

〔注〕

- ① 古賀（2011） この記述は主に pp.113-116 による。
- ② 古賀（2011） p.116

1. 2 会田雄次氏の「察し」論

会田雄次氏は『日本人の意識構造：風土・歴史・社会』の中の「ワンダフル」では相互理解できない」という節で、まずヴォリンガーの異文化理解の方法を紹介している。

「根本からまったく物の考え方が違う文化圏や時代の精神を理解するためにはどのような方法を取るべきか、ヨーロッパ人は、自分たちの考え方だけが唯一の普遍的合理的なものと考えている。それだから自分たちと同じ性格の文化である古典時代のギリシアとローマだけしか評価できないのである。自分たちが最高であり、それに近いものを、その近い順にしたがって価値づけていくという馬鹿げた思い上がりもそこから来る。（中略）

ではどうしたらよいか。（中略）

まず直感を基盤に、その時代、その文化の思考方向を見定め、その方向に自分とは正反対の感情と論理の体系を築いていくことだ。自分たちが正しいと思うことを不正とし、美とするものを醜とし、善とするものを悪とするという価値体系を考えていくのだ。そうしてこそはじめて自分とは異質の文化構造が見定められることになるだろう。」①

「ヴォリンガーが主張してヨーロッパではまったくの不評だった異質文化の理解法は、案外わたしたち日本人がつねにとっている方法ではなかろうか。（中略）歴史を否定することは自分自身を成り立たしめているものを否定することである。いわば自己の白紙還元でなければならない。（中略）

日本に独特な「察し」と「思いやり」というコミュニケーションのあり方は、この白紙的自己の基礎の上に築かれているといえよう。いや白紙になりうる前提条件、白紙になるための方法として「察し」と「思いやり」があったといえよう。（中略）

襖はそれ自体障壁としての能力はほとんど持っていない。音は自由自在に通過する。幼児だって簡単に破壊して通れる。鍵はかけられない。和辻博士の定義を借りて、それを和風にもじると、襖という障害物が機能することが可能なのは、それを使用している団体の成員の間に、それを障害物・へだてとして尊重するという約束が暗黙の内に成立し、その約束が充分守られているということを前提とする限りにおいてである。

しかもその約束が守られれば、この上なく理解が行きとどいた「水入らず」の生活がおくれるのだ。襖が閉ざされているかぎり、話し声が自然にもれて来たとしても、人はそれを聞いてはならないのである。成員の間には秘事がなくて、しかもあるという芸当はこうして生まれるといえよう。

襖が閉ざされている場合、それが入室拒否を示すのか、入ろうとするときは許しを乞えということなのか、合図をしてから入ってくれということなのか、単なる風よけのためなのかという区別が「察し」によって理解されねばならない。

そういう相互の「察し」がないときは、襖の「へだて」としての機能の発揮は充分ではなく、したがって、その成員の共同生活、それが家族である場合なら、家庭生活も円滑に行かないということになる。うまく行かないどころか、そもそも共同生活自体が成立しない。弱い成員にはまさに生き地獄といった結果が生まれるのだ。」②

「日本人は言語発生と成長の段階で、拾集と純粋な農耕だけを持ち、狩猟を経験していない、実に特殊な民族である。この場合狩りといっても、漁撈ではなく、大きい獣を共同作業で倒す狩りである。

ヨーロッパ人には、ヨーロッパ語の成立期にこういう狩りが大切な生業だった。とすると、そういう共同動作をしている人間は互いに、明確に意志を伝達するシグナルを交換しなければならぬ。それが不正確で曖昧なものだったら、作業はうまく行かないし、危険でもある。発生によるシグナル、つまり言葉は明確な対象限定、正確な意志表示を持つものとなる。

しかし、拾集や純粋な農耕の共同動作の世界ではそんな必要はない。ここで生まれた言葉は、いたわりや、ねぎらい、はげまし、同情といった狩りには不必要で有害な、情意の交換用のものとなる。

日本語が感情の伝達ではたいへん複雑微妙な点までも表現できるようになっていながら、意志の正確な交換には案外不適當だというのは、このようなところに原因があるのではなかろうか。とするならば、究極的な相互理解には「口ほどにものをいう目」の方がうまく行くという考え方が当然生まれて来るという結論になるはずである。」③

以上引用してきたように、会田雄次氏は、「察し」や「思いやり」が日本人同士のコミュニケーションにおいて重要であるということ、そしてなぜそれが重要なのかということについて、「襖」を例に説明し、さらに最後の部分では歴史的な原因理由を指摘している。この「察し」や「思いやり」は、まず自分の立場に立ったうえで、それを相手に理解させるというやり方ではない。反対に、まず相手の立場に立ってから、その相手の立場を考慮しながら自分の主張をしていくというやり方であって、この相手を「察する」「思いやる」ことこそ、「空気を読む」ことに他ならない。

〔注〕

① 会田 (1972) pp.92-93

② Ibid. pp.96-100

③ Ibid. pp.104-105

1. 3 ハルペン・ジャック氏の「日本語の曖昧さ」論

ハルペン・ジャック氏は『ユダヤ人の頭日本人の頭：放浪民族と孤立民族の発想と論理』という著作の中で「第三章 察しの言語、“場面依存性”」という章を立て、日本語また日本人の日本語使用の特徴を指摘している。

「国連の調査によると、日本語は、科学技術伝達用の世界語としては六大言語の一つに数

えられるほど高く位置付けられていますが、その反面、汎用語としての国際性においては、残念ながら非常に低い評価しか与えられていません。

では、なぜ日本人の話が外国人に通じにくいのでしょうか。

その原因としていろいろ考えられますが、そのいくつかをここに挙げてみることにします。」①

として、九つの点を指摘しているが、その中でも以下の三点を重要視したいと述べている。②

- | |
|---------|
| 1 曖昧性 |
| 2 非論理性 |
| 3 場面依存性 |

ハルペン・ジャック氏は、まず「1 曖昧性」について、「ともあれ、日本語が外国人に通じにくいいろいろな原因は、どれをとっても日本の社会環境に長年どっしりと根を降ろして、日本人にとっては空気のように自然でごく当たり前のものばかり。いや、むしろ、日本人同士の会話の滑らかさを支えている潤滑油であると言っていいでしょう。」③と述べ、さらに、「主語、時には目的語や述語を表面に出さないで、それとなく匂わせながら、角が立たないように話すことがたいへん多い」④と、指摘している。また、「日本人の生活、言動、態度を、さまざまな角度から分析してみると、大部分の現象がとても曖昧に見えてきます。」⑤「《こう言ったら嫌われるのではないか》とか《何とかこの場は丸く収めておこう》という思惑が先に立ち、明確な表現を意識的に避けてしまう。これも調和を重んじ、その場を取り繕う精神の現われにほかならない。つまり日本人の曖昧さは、単に話し方ばかりではなく、社会生活のあらゆる面に共通の現象なのです。」⑥と、結論付けている。

つまり日本人が明瞭に日本語を使用しないのは、はっきり表現することが相手をはっきり表現しないと理解できない相手と決めつけることになるからであり、それは野暮でもあるし失礼にもなるという発想に基づいているのである。この発想は、相手をこちらの言い分を「察する」ことができる聞き手と認めていることを暗に主張するという手の込んだやりかたといってもよい。この点については、「1. 4」の直塚玲子氏の議論も参照されたい。

「2 非論理性」については省略する。

ハルペン・ジャック氏は、「3 場面依存性」について、「日本語は、言葉だけで意思を伝えようとしても、その場面（シチュエーション）にピッタリ合った言葉でなければ伝わらない——つまり、その言葉を理解するにふさわしい作用を与える状況が不可欠なのである。」⑦と、指摘している。その後、ハルペン・ジャック氏自身が体験した具体的な例を四つあげ、「私の言葉そのものではなく、言葉が代表している内容がその場面にふさわしくない。つまり、聞き手の期待する内容と噛み合わなかったから、（聞き手の：筆者注）脳がそれを受け入れないというわけなのです。」⑧と、説明する。そして、「私は、こういう現象を“場面依存”又は“場面らしさ”と名付けていますが、“日本語ブーム”の今日、誰もこの日本語の重要な特徴を本格的に研究していないことは不思議でなりません。それどころか、その現象の

存在にさえ気付いていない学者が非常に多いようです。」⑨と、我々には少々耳の痛いことまで指摘している。

ここでハルペン・ジャック氏は「場面」を説明して、「“場面”とは、英語のシチュエーションに当たります。その場における聴覚、視覚、雰囲気などを総合した特定の状況を指します。つまり、“場面に依存する”とは、言葉以外の要素が強く働いて、言葉の働きを弱めてしまうこと、言葉だけでのコミュニケーションを妨げてしまうことを意味するのです。」⑩と述べ、さらに、「たいていの日本人の脳細胞は言葉による信号を受け取るとき、その信号の内容を分析する前に、まず“場面”との適否を判別します。“場面らしい(場面にふさわしい)”信号であれば素直に反応しますが、“場面らしくない(場違いの)”信号であれば、それを拒絶し、代わりに“場面らしい”架空の信号を自らひねり出して、それに反応する仕組みのようです。」⑪と、「場面」論を展開していく。⑫⑬

さらに日本語のみならず日本文化にも話を広げ、「たとえば“生け花”。生け花は、花器に生けた花だけでその美を感じとるのではなく、それが置かれている床の間、その部屋、家、庭…など、周り全体の日本的な状況の中にピッタリはまりこんでいてこそ真の価値を發揮します。その生け花の美しさは、場面との調和の中でこそ見る者の心を打つのです。

また、俳句における芭蕉の偉さもそうでしょう。彼の句には“地”つまり、どういう背景や環境の中からその句が生まれたか、の説明があります。だから誰が読んでも句の味わいがよく分かり、いつまでも親しまれる。つまり句と地を合わせた場面全体が理解できるから、彼の本当の心が読み手に通じるわけです。

日本語もこれと同じで、一つの言葉を理解するには、その言葉の内容にふさわしい場面が伴っていなければなりません。その“場面らしさ”がなければ、なかなか理解できず、言葉だけを独立で機能させようとしてもカラ回りになってしまうのです。」⑭と、説明している。

そして最後に、「さて、私は、この場面依存性という日本語の特異性を認識したとき、初めて日本語理解の鍵を握ったと思いました。いや、日本語のではなく、正しくは日本人の話し方の特異性を知った、と言うべきかもしれません。」⑮と述懐している。

「空気を読む」ことは、言いたいことをすべて言語化して伝えるのではなく、その場の雰囲気にかかせて、相手の「察し」を期待するという態度を取らせるが、その結果が「場面依存」と言えるのではないか。とすれば、ここでの議論は小池清治氏の『日本語はどんな言語か』の中の、「日本語の文の第一の特徴は、構造的には非自律的であり、一般に文脈の助けを前提として文として成り立つという性質である。(中略)日本語の多くの文は、文脈の助けを得て、初めて文になる。」⑯という指摘と重なる。

〔注〕

① ハルペン・ジャック (1979) p.126

② Ibid. p.127

③ Ibid. p.128

- ④ Ibid. p.131
- ⑤ Ibid. p.133
- ⑥ Ibid. p.134
- ⑦ Ibid. p.135
- ⑧ Ibid. p.140
- ⑨ Ibid. p.141
- ⑩ Ibid. p.141
- ⑪ Ibid. p.141
- ⑫ ここでの指摘は江村（2002）「文の文法性と容認度」で論じた、日本語の文の場合、文法的に correct でなくても、場面の支えがあれば acceptability（容認可能性）はあがるという議論とも関連する。例えば、「私の娘は男です」という日本語の文についての議論を参照されたい。
- ⑬ ここでハルペン・ジャック氏を取り扱っている「場面依存性」については、すでに江村（2016）で、森有正氏の「現実陥入」の議論との関係で触れた。
- ⑭ Ibid. pp.142-143
- ⑮ Ibid. p.149
- ⑯ 小池（1994） p.27

1. 4 直塚玲子氏の「場面依存性」論・「察し」論

直塚玲子氏は『欧米人が沈黙するとき：異文化間のコミュニケーション』の中で、日本語ないしは日本人の日本語使用における「場面依存性」に関して、

「日本では、“場面や状況”を無視して、自分の好みや意見を明確に表現することはむしろかしい。発言の相手は誰なのか、相手と自分との関係・自分の発言が周囲に与える影響などを考慮に入れないと、そうやすやすと自分の意見を言うことができない。特にグループの中では、この傾向が顕著になる。

ところが、欧米人は、“場面依存型”の日本的コミュニケーションの特徴を無視して、単刀直入に、しかも矢継ぎばやに、個人の意見を求めてくる。（中略）こんな時、欧米人が強迫者にみえてくる。場面状況は無視して個人の意見の表明を強要されると、日本人はプライバシーを侵害されたと感じる。」①と、日本語という言語は「場面依存性」が高いと指摘している。

また、「察し」について、「日本人は、はっきりノーと言うのをいやがる。ノーと言わなければならない場面ですら、その気持ちをあらわに表現することにためらいを感じて、意図的に婉曲な表現を使ったりする。」②と、日本人の婉曲表現に触れ、「日本人の婉曲表現では、氷山の一角だけしか表現されないのので、その全貌を推測するのは勘や察しにまかされている。」③と、日本語の婉曲表現と「勘」や「察し」との関係を描き出している。

直塚氏は、次に日本語の「察し」に対するアメリカ人のいらだちを書いている。

「日本人は、人の話を客観的に聞かないので気疲れします。いつもことばの裏の意味や暗示にばかり気を配っているが、それがいつも話し手の発言の中に含まれているとは限らない。また、話し手が客観的な一般論として話していることを、すぐ自分に直接関係のあることと考えると、何か含みがあるのではないかと、いらぬ気をまわす。日本人と一緒にだと、いつも警戒心を働かせなければならないので、苦痛！」④と、日本人の「気をまわす」察し合いについて批判するアメリカ人男性の意見を紹介し、「日本的思いやりや察しが、かえって相手に迷惑がられているわけだが、“核心に直接触れる言い方”を避け、“重要なことはことばにしない言い方”が美德とされる日本では、言外の意を察知することが、コミュニケーションを円滑にするためには、非常に重要である。(中略)日本では、ウチソト意識に代表されるように、グループへの帰属意識が強く、グループをぬきにして個人はありえない。“相手あっての自分”という個の捉え方の中では、いつも相手を自分より一段上位においておくことがタテマエとなる。」⑤という説明をしている。

以下は、このような日本人の行動に対する、アメリカ人との海外生活の経験がある日本の若者の訴えである。

「すべての国籍の人々が、(日本人の日本語使用における：筆者注) 婉曲表現を道義的見地から非難しているが、わけてもアメリカ人が最も攻撃的である。つづいて、海外生活を体験した日本の若者たちが、日本の婉曲表現を「不正直で無礼である」と考え、混乱と誤解を避けるために、日本人はもっとはっきりとイエス・ノーを言うべきである、と主張している。道義的反発の主な意見をあげてみよう。」⑥として、八つの意見をあげている。詳細は省くが、以下に日本人に対する評価の部分だけを簡条書きにする。

「ずるい」「無礼で独裁者」「現実から逃避」「責任をとろうとする気持ちに欠けている」「すべて偽善」「気転がきかない」「無礼」「非能率」⑦と否定的ばかりである。

「道義的反発の代表的な意見を読んでも、相手を傷つけまいとする日本的配慮と、欧米的配慮の間には、大きな差異があることがわかる。

欧米人にとっては、面と向かって非難されたり拒絶されたために、感情が傷つけられたと考えるのはおとなげないことである。否定的な意見や批判に、瞬時感情が傷つけられたにしても、そのことは問題にしないで、提起された問題を真正面で受けとめ冷静に対処するのが、一人前の大人である。したがって、はっきり言わずにほのめかされると、甘やかされた子供なみに大人が扱われることになり、彼らはひどい侮辱を感じる。相手を傷つけまいとする欧米的配慮とは、否定的な意見や批判を婉曲に言わずに、はっきりとことばで表現して、相手にぶつけることである。

日本的配慮は、これとは対照的だ。あからさまにものを言うことは、日本では、相手を侮辱することになる。「あの人は、一から十まで説明してやらないと何もわからないのだから、困ったものです。子供ならまだしも、大人のくせに勘がわるいので、手間がかかって仕方がありません」とは、察しの悪い人についてよく使われる表現である。つまりあからさまに言うことは、相手をよほど勘の悪い人か、何もかも言ってきかせなければわからな

い幼児なみに扱うことになり、相手に対して非常に無礼な行為になってしまう。馬鹿正直に何もかもしゃべらずに、氷山の一角だけをのぞかせておいて、その全貌を推測するのはききにまかせるのが、相手を傷つけない日本的配慮である。」⑧と、日本人と欧米人を対比して見せ、

「欧米人同士の会話を聞いていると、話し始めたばかりで、すぐ議論に発展する。彼らにとって会話と議論は同義語である。(中略)この知的興奮が会話の醍醐味である。対立がはつきり形をなしてくると、議論はますますおもしろくなってくる。互いに相手を説得しようとやっきになるから——。

数年前に、日本在住の外国人からカルチャー・ショックをきいてみたが、その中の質問「日本に住んでみて、物足りないと感じることは何ですか」に対して、「火花を散らすような知的議論ができないこと」という答えがあったのを思い出す。(中略)

日本人同士だと、話し手がある意見を出しても、相手は決して頭からそれを否定するようなことは言わない。(中略)相手と対立するのではなく、相手の立場に立って自分も考えているのだ、「あなたに共感する部分もたくさんありますよ」という姿勢をまず示すことが必要である。そのあとで、もし反対意見があれば、自分の意見としてではなく、一般的な意見として、しかも婉曲に提示する。相手が共感を示さなければ、しばらく時間をおいて、別の婉曲な表現方法を工夫して、相手が共感するのを待つ。このように、日本人の会話は相手との対立を避け、相手と共感し合うことが核になっている。」⑨と解説している。

また、別の個所でも、ある女子大学での出来事を書いている。

「ある蒸し暑い日に、アメリカ人教師が授業を行っていた。隣の教室では発音練習が行われていたので、教室の窓は全部閉めたまま。しばらく辛抱して授業したが、さすがに暑い。教師は窓際の学生に「窓をあけてもいいですか」(“May I open the window?”)と尋ねた。

当然、「はい、どうぞ」という答えが返ってくるものと期待していたが、その期待は全く裏切られてしまった。その学生はもじもじして何も答えなかった。「こんな簡単な英語がわからないとは思えない」と、そのアメリカ人教師は怒って、同僚の小林氏にその話を伝えた。

小林氏は、アメリカ人教師の話が信じられなかった。そこで、次の時間に、同じ状況をその教室で作って、“May I open the window?”と、みずから尋ねてみた。ところが、驚いたことに、結果はアメリカ人教師の場合と同じ。学生は黙ったままで、答えようとしない。

業を煮やした小林氏は、日本語に切り換えて、何故答えないのかその理由をただしてみた。すると、「私は結構ですが、ほかの方がどう思うかわかりませんから、私に聞かれても困ります」という答えが返ってきた。

この学生は、「窓を開けてもいいですか」という質問が、彼女個人に向けられたとは感じていない。みんなの前できかれたものだから、クラス全員の合意がないままに、個人的意見を述べて、ほかの人に迷惑をかけてはならないという配慮が働き、黙っていたわけである。」⑩

直塚玲子氏は、このエピソードに対する解説として、

「グループの中で個人の意見を述べない日本人の習性は、外国人に、責任回避・臆病・自主性がない・意見がない、などと誤解されている。

しかし、日本の社会では、個人よりも集団が優先する。個人は集団との調和の中で、自己の存在を証明しようとする。したがって、グループの成員の合意がないうちに個人の意見を述べることは、身勝手な行為と解される。外国人が非難するように、意見がないのも臆病なのでもなく、意見はあるが、グループのほかの人々の意向がわからないうちは、軽々に個人の意見を出すべきではない。」⑪

「この対立する価値観を、さらに分析してみると、個人のアイデンティティ（存在証明）の仕方の違いにたどりつく。日本人は、グループの中に個人を埋没させ、個人と全体とが一体となった形で、自己の存在を証明する。これに対して欧米人は、あくまで個人単位であり、自己主張によって、その存在を証明する。」⑫と書いている。

つまり日本人は、欧米人とは異なり、自分の意見があった場合、それをそのまま口に出して言うていいわけではなく、自分が属する他のメンバーの意見に配慮しながら、いわば当たり障りのない形でしか自分を主張できないという文化を持っているということである。これこそ「場の空気を読む」ことを強制されている日本人のありさまであろう。

〔注〕

① 直塚（1980）pp.115-116

② Ibid. p.158

③ Ibid. p.158

④ Ibid. p.158

⑤ Ibid. p.159

⑥ Ibid. p.160

⑦ Ibid. pp.160-161

⑧ Ibid. p.161-162

⑨ Ibid. pp.162-164

⑩ Ibid. pp.187-188

⑪ Ibid. p.193

⑫ Ibid. p.198

1. 5 池上嘉彦氏の「状況」論

池上嘉彦氏は『記号論への招待』の中で、「日本人の社会的な行動様式を見てみると、「個人」が常に自らを取りまく「周囲」（あるいは「全体」）に同調する形で行動するという傾向が顕著である。いずれの場合も、「個人」がそのまわりのものから独立するというというよりは、自らの輪郭をぼかし、まわりとの連続性を保つということが起こっている。」①と指摘している。ここで「周囲」「全体」「まわりのもの」等の言い方で表現されているのは、

上に述べてきたハルペン・ジャック氏や直塚玲子氏のいう「場面」「状況」という考え方と共通している。

[注]

① 池上 (1984) p.235

1. 6 井沢元彦氏の「空気」論

井沢元彦氏は『言霊:なぜ日本に、本当の自由がないのか』の中で、まず「言霊 (ことだま)」とは何かを説明している。

「コトダマとは何か、一言で言ってしまえば、それは「言葉と実体 (現象) がシンクロする」「ある言葉を唱えることによって、その言葉の内容が実現する」という考え方のことだ。(中略)

ここで肝心なことは、言葉に秘められたコトダマの力を発動させるには、その言葉を口にする、すなわち声に出して発音しなければならないことだ。頭の中にしまっておいてはいけない。そこでコトダマを生かすためにはそれを口に出すという行為が必要になる。このことをコトアゲ (言挙げ) という。

コトアゲとは具体的に言えば、「雨が降ってほしい」という願望を実現させるために、「雨よ降れ」という言葉を口にする (発音する) ということになる。いや、必ずしも命令形でなくてもいい。「雨が降る」と口にただけでも、その結果、コトダマの力が発動されて、実際に「雨が降る」。それがコトダマの世界である。」①

そして、以下のようにコトダマをめぐる様々な事象を例示していく。

第一章「コトダマと言論の自由」では、「差別語に対する言葉狩り」や「部落差別問題」「ピノキオ差別文学」を、第二章「日本史の中のコトダマ」では、「イミナ」や「日米構造協議の誤訳」を、第三章「戦争とコトダマ」では、「戦前の敵性語追放」や「事変という言い方」「自衛隊イジメ」を、第四章「契約とコトダマ」では、「教会結婚式の誓いの言葉」や「祝詞 (のりと)」「有事」をそれぞれ例としてあげ、日本人がいかに「言霊 (ことだま)」に支配されているかを論じている。

井沢元彦氏のあげている例によれば、ある場でその場に不穏当な言葉を言うと、例えば結婚式で「お開き」の代わりに「終わる」と言うと、その二人の関係が終わることに繋がるから言うてはいけないとか、旅行の話をしているときに「雨が降るかも」と言うと、「そんなことを言ったから雨が降ったぞ」と言われるとか、試合で「負けるかも」と言うと「負けるなんて言うから負けちゃったぞ」と言われるといった事象などは、不穏当なこと (言) を言ったからその内容が実現したと捉えられるのである。

これは、その場の「空気」に合わないことを言うと、それが実現してダメになるという発想で、そんなことは言うてはいけないとか、そんなことを言うやつは仲間ではないという判断に繋がるわけで、これは空気に「水を差す」行為である。

逆に、コトダマが力を発動して、その言葉の内容が実現するとその場のメンバーが全員信じているときには、それが空気となり、それに反対することは誰にもできなくなる。

つまりコトダマの議論は、「場の空気」を何が成り立たせているかを考えるときに大きなヒントになるわけで、井沢元彦氏のコトダマ論をここで取り上げて紹介したのはそのためである。

〔注〕

① 井沢 (1995) pp.12-13

1. 7 冷泉彰彦氏の「空気」論

冷泉彰彦氏は、『「関係の空気」「場の空気」』の「はじめに」で以下のように述べている。「変化の激しい時代である。日本社会には多くの問題があり、それぞれ改革派と守旧派が対立軸を作って抗争を繰り返しているように見える。だが、本当に対立は機能しているのだろうか。

国際関係、少子化、高齢化、若年層の雇用、教育、財政赤字、消費税率、年金…。論点のそれぞれは深刻なのに、激しい対立もなければ現実的な妥協もない、それでいて何となく何かが決まっていく、あるいは先送りされていく、それが日本社会のようだ。

そこでは「空気」がすべてを支配しているといってもよいだろう。論理や事実ではなく、「空気」が意思決定の主役になり、またその「空気」が風向きの変化によってよく変わるのだ。」①

「そこには、冷静な事実の把握や、原理原則と政策のすり合わせはないといっていい。

「空気」が支配しているのは、一国レベルの「世論」だけではない。個々の企業における「社内世論」や、学校のクラスにおける「先生むかつく」とか「〇〇ちゃんウザい」というようなものも、「空気」に他ならず、それぞれの小社会であたかも絶対権力を握っているかのようなものである。

そして、この「空気」に対して、日本人の一人一人は無力である。

「何ごともその場の空気によって決まる、というのは良いことではない。だが、その場の空気が濃くなればそれに対抗するのは難しいし何よりも損だろう」

そんな感覚が日本の社会の隅々までを満たしている。こうした感覚自体が「空気」に他ならないのだが、「空気読めよ」という身も蓋もないフレーズがよく聞かれることを考えると、この空気は濃くなる一方のようだ。」②と述べ、もはや「空気」の存在そのものを検討するという姿勢ではなく、日本社会においては「空気」が存在しており、それに日本人はコントロールされているのが問題であるという視点から、この「空気」をどう克服すべきかと議論を始めている。

冷泉彰彦氏によれば、「ここでは、仮に、三人以上の場における空気のことを「場の空気」、一対一の会話における空気を「関係の空気」と呼んで区別することにしよう。そして、非

常に大ざっぱであるが、「場の空気」には問題があり、「関係の空気」はむしろ必要なもの、という仮説を持ちながら論を進めてみたい。」③として、すべてを言わなくても通じるという関係における「空気」の存在に関しては肯定的に、その逆に、ある場においてその場の「空気」に水を差すような意見を許さないような「空気」の存在に関しては否定的に捉えたうえで、この後者の「空気」をどう考えるべきか本文の中で議論している。詳細は冷泉彰彦氏の著書を参照されたい。

〔注〕

- ① 冷泉 (2006) p.3
- ② Ibid. pp.4-5
- ③ Ibid. p.9

1. 8 池田信夫氏の「空気」論

池上信夫氏は、「日本人はなぜ決まられないのか」という副題をもつ『「空気」の構造』を書いている。池上信夫氏は、〈はじめに〉で、2009年の政権交代に触れ、

「役所や企業のタコツボ的な自律性が強く、人々がまわりの「空気」を読んで行動するため、責任の所在が曖昧で中枢機能が弱い。部下が上司の足を引っ張る「下克上」の風潮が強いため、長期的な戦略が立てられない。こういう特徴は多くの人に指摘されてきたが、なぜ日本社会にそういう特徴があるのかはよくわからない。」①と書いているが、この著作はその解答を「空気」にもとめた論であるといえるだろう。彼は、〈序章「空気」が原発を止めた〉の最後のパラグラフに、「このように原発が恐いという「空気」が、憲法を超える強い拘束力をもつ日本とは、どういう国なのだろうか。なぜそれは、すべての日本人にこのように強い支配力をもつのだろうか。それを理解するためには、千年以上前にさかのぼり、日本人の国民性について考える必要がある。」②と書いている。

「空気」が途方もない支配力を持っているというのは、これまで見てきた例と同じであるが、少々異なるのは、千年単位で考えるべき日本人の国民性の問題であると指摘しているところであろう。

池上信夫氏は、第一章〈日本人論の系譜〉で日本人論の歴史をおさらいした後、第二章〈「空気」の支配〉では、「日本軍を動かした「空気」」という節で山本七平氏を引用して「空気」支配の実情を報告している。第三章〈日本人の「古層」〉、第四章〈武士のエートス〉の議論のあと、第五章〈日本軍の「失敗の本質」〉では、戸部良一氏（他）の『失敗の本質』を紹介している。そこでは、大東亜戦争における六つの作戦を分析し、「その背景にある日本軍の組織的な欠陥を論じているが、その特徴は今も日本の企業に受け継がれている。」③とし、いくつかの特徴をあげているが、その一つとして「主観的で「帰納的」な戦略策定——空気の支配」④があると指摘し、これらの「日本軍の行動は、一部は遺伝的に受け継がれた日本人の伝統的な行動様式なのだ。」⑤と結論づけている。

さらに、「日本人は「空気」を読んでみんなに同調する前向き推論が得意だが、これは日本軍のように場当たりの行動を誘発し、最適解から大きく逸脱する部分最適に陥りやすい。普通はこのような集団は戦争で淘汰されるが、日本では長く淘汰圧が低かったため、戦争目的より集団内の和を優先する伝統的な風習が残っているものと考えられる。」⑥としている。

第六章〈日本の経営の神話〉では、伊丹敬之氏の「人本主義企業」を取り上げ、日本における経営のすぐれた点として「人本主義」をあげ、「それ（「持ち合い」：筆者注）は人々の長期的関係に依存するシステムで、集団主義というより「あいだ」や「世間」を中心とする「関係主義」ともいべきものだ。」⑦と説明している。そして、これこそが、日本の経済を危うくしたのだと、「日本的雇用がデフレを生んだ」⑧という節の中で解説している。

第七章〈平和のテクノロジー〉では、「後醍醐天皇や織田信長のような中国的君主は日本では長続きせず、徳川家康的な調整型リーダーがつねに勝った。さらに長期にわたってタコツボ型システムを固定したため、システム1の同調圧力が強まったものと思われる。それは長い平和によって人々に広く定着し、それによってローカルな秩序を維持する「平和のテクノロジー」なのである。」⑨と述べ、「空気」を読む調整型の人間関係の作り方が、日本的集団主義や想定外の目的不在の行為につながっていく様子を捉えている。

〔注〕

- ① 池田（2013） p.10
- ② Ibid. p.21
- ③ Ibid. p.142
- ④ Ibid. p.143
- ⑤ Ibid. p.144
- ⑥ Ibid. p.148
- ⑦ Ibid. p.166
- ⑧ Ibid. pp.178-180
- ⑨ Ibid. pp.210-211

2 「空気」の存在を利用・指摘した作品例

ここでは、「2. 1」で、三橋貴明・さかき漣両氏の『真冬の向日葵』を、「2. 2」で、田原総一郎氏の『誰もが書かなかった日本の戦争』を紹介する。

2. 1 『真冬の向日葵』

ここで紹介するのは、三橋貴明・さかき漣著『真冬の向日葵』であるが、この作品はマスコミがどう「空気」をつかって民衆を惑わすのかという、現代のマスメディア論である。後半では「空気」が頻出する。そのうちいくつかを以下に引用する。

「《マスコミとはそういうものだ。人間、中立公正では有り得ない。全ての報道は偏向している。マスコミが「国民の声」というとき、それは「マスコミの声」あるいは「マスコミの望み」なのだ。しかも、マスコミはセンセーショナルに危機を煽れば、新聞が売れ、テレビが見られると勘違いしている。結局、国民が常日頃から「正しい情報」を手に入れようと努力しない限り、国内の情報は「空気」によって歪められ、民主主義が成り立たなくなる。いや、民主主義が成り立たなくなるのではなく、民主主義により国家が向かうべき方向を間違えてしまうという皮肉な事態になる。ナチスドイツは、ドイツ国民の投票により政権を担った。ナチスドイツを誕生させたのは、ドイツの民主主義なのだ》」①

「《(冒頭略) どんな企業もその企業なりの「文化」というものを持つ。私のいる組織においても、もちろん「文化」があり、思うに任せないことが少なくない。文化とは「空気」とも言い換えることができるわけだが、特にマスコミ業界はこの「空気」が持つパワーが大きい。社内の「空気」に逆らい、正しいことを貫くことは極めて難しく、多くの者が挫折してしまう。貴方がどのような仕事に就くかは分からないが、初心を忘れず、何とか「空気」を御していくことができるように祈っています》」②

「記者や評論家たちは、自分自身を取り巻く“空気”に従い、ひたすら現在の内閣総理大臣である朝生を批判することを続けた。“空気”の中で朝生批判を展開し、自らの主張が“空気”をますます濃くする。新聞記者たちは、自分たちがどれほど愚かで醜い真似をしているのか、気が付かないようだった。」③

「(前略) 少なくとも、日本人なら、場の空気に合わせるのは当たり前じゃない？ 私は必ずそうするわ。だって、それが常識だから」

空気。雪乃はショックを受ける。

空気に逆らわない、日本人。」④

「空気。なぜか、その空気の中で、人は役割を決められている。周囲から期待される“役割”を演じていれば及第、演じずに自分を出して周囲を裏切ったら落第。おかしいことだ。」⑤

「昨今の日本では、マスコミについて、「第四の権力だ」「否、今や第一の権力だ」と批判する人が少なくない。しかし、マスコミが第一の権力なのではない。マスコミ内の“空気”を作り出す者こそが、日本の第一の権力者と言えるのだ。」⑥

「業界に蔓延する空気はもはや御しがたく、メディアは政権を肯定する報道がまったくできない状況となっていた。この空気に逆らい、朝生政権を褒める報道をすれば村八分に遭うような恐怖を、全マスコミ関係者が共有していたのである。」⑦

「結局、現在の日本のマスコミを支配しているのは、プラザ合意のときから、否、もしかしたらそれ以前から、一貫して“空気”なのだ。空気は、まさに山本[七平]の言うように「絶対的権威」として、あちこちに顔を出し、甚大な力を行使する。しかも、同時に山本の言う通り、空気に責任を取らせることはこの世の誰にもできない。

空気がマスコミの論調を変え、世論に影響を与え、選挙結果を操作し、最終的には政治と歴史を変えてしまう。空気の結果、国家がおかしな方向に向かったとしても、その責任

は誰も取れない。なぜなら、“空気”だからである。」⑧

「空気」を「文化」とイコールのものとして捉えているのは卓見である。また、山本七平氏が指摘した「空気」が、このように小説の中で生き生きと描かれたことはなかった。

また日本のマスコミについては、空気という観点からではないが、ウォルフレンも以下のように批判している。

「偽りのリアリティを盾にして民主主義の実現を阻止している制度は、(中略) 審議会だけではない。(中略) 新たにつくり変えるべき制度もある。

そのうちもっとも重要なのが日本の報道機関(プレス)だ。

私はもう何年も、ことあるごとに、日本の大新聞は日本の民主主義実現を阻む単独では最大の障害物だと書いてきた。(中略) マスメディアはいまだ、民主主義に寄与すべきジャーナリズム本来の姿からはかけ離れている、と私は思う。」⑨

日本のマスコミは、自らの使命を、真実を報道することよりも、ある種の「空気」をつくりだすことに見出していると言ったら言い過ぎであろうか。我々はもっとメディア・リテラシーを身に着け、「空気」に流されないように注意する必要がある。

[注]

- ① 三橋・さかき (2012) p.59
- ② Ibid. p.107
- ③ Ibid. p.155
- ④ Ibid. p.175
- ⑤ Ibid. p.176
- ⑥ Ibid. p.214
- ⑦ Ibid. p.232
- ⑧ Ibid. p.236
- ⑨ ウォルフレン (1994) p.286

2. 2 『誰も書かなかった日本の戦争』

ここで紹介するのは、田原総一郎がこの著書の帯に「この本を書くために私はジャーナリストになった!」と自ら書いているほど心血を注いだ作品である。この著書の冒頭に「なぜ今、この本を書くのか」という章があり、「日本史上最大の失敗が、大東亜戦争だと私はとらえています。(中略) なぜこういう戦争を始めてしまったのか、その検証を私のいわばライフワークとして、これに取り組まなくてはいけないという思いがいつもありました。そのためにも自分はジャーナリストになりたかったし、なったのだと信じて、ここまでやってきました。」①と書き、田原氏がなぜジャーナリストになったのかというきっかけを明らかにしている。田原氏の疑問は、「私は長い間、一つの疑問を持っていましたが、それを、なかなか公に発言することはできませんでした。それは、日本は侵略戦争をしたのかとい

うことです。」②とし、世間の「空気」について触れている。

「私はずっと、それを口に出して言うことはできませんでした。

つまり、世間には、「あの戦争は侵略戦争であり、あの戦争を始めたやつは犯罪者である。だから、A級戦犯として処刑されて当然である」という空気が濃厚で、それに対して反対するのは、善と悪で言えば「悪」だという風潮が強かったからなのです。」③

「その疑問に取り組むことで、世の中から強く非難され抹殺されるのではないかという恐怖心があったからです。」④

しかし、それにも拘わらずこの著書を書いた理由として、「ですが、歳をとるにしたがって、この敗戦を知っている世代の人間として、この疑問はなんとしても解かなければいけないという気持ちが強くなってきました。」⑤と書いている。

ちなみにこの著書の最終章のタイトルは「太平洋戦争は、侵略戦争ではなかった」である。⑥

一人のジャーナリストの意見を、死を前にしていると自覚する瞬間まで封殺する「空気」の恐ろしさに、いまさらながら驚かされる。

〔注〕

- ① 田原 (2011) p.17
- ② Ibid. p.17
- ③ Ibid. p.18
- ④ Ibid. p.188
- ⑤ Ibid. p.188
- ⑥ Ibid. pp.283-301

3 まとめにかえて

日本では、人が複数人集まると、そこにその人々の間での親密感というか、その関係がどういう関係かということに基づく「空気」が形成あるいは熟成される。ゆえに、日本人が誰かと出会うと、その相手との間でどういう「空気」をつくるのかがまず問題となる。というか、それはすでに遅いのかもしれない。なぜなら、日本人の場合、相手が誰であるかによってすでにある種の間関係が前提とされているわけで、例えばヨーロッパ人がまず「我」から始まるのに対して、日本人では「汝」がまず存在し、その「汝」との関連によって「我」が誰であるかが規定されるということになっているからである。(この点に関しては「空気に関する論考Ⅰ」であつかった森有正氏の議論を参考されたい。①) とにかく日本人が複数人いればそこに「空気」ができるのである。一旦その「空気」ができあがると、それがいかにその場を拘束するか。その拘束のために、その場のメンバーは、対立をさけ、その「空気」を維持することが本来の目的であるかのようにふるまうようになる。そこで、一種の仲間意識が生まれ、それを維持する方向に各メンバーは協力する。この間の事情は「やっぱり」という表現が説明してくれる。「やっぱり」というのは、自分の意見がまわり

の皆さんと変わらないという前置きの表現である。そしてそのグループ内での「空気」に「水を差す」と、「空気が読めない人」という烙印が押され、最悪の場合、そのグループの他のメンバーから無視され、さらにはつまはじき、「村八分」、つまりその集団（社会・共同体）から追い出される。この人間関係のつくりかたが日本人的「ムラ」を構成するのである。この「ムラ」の構成に関わるのが「言霊」信仰で、この「ムラ」を維持するのが「察する」「相手の立場に立つ」等々といった行為である。これまで日本文化あるいは日本人の人間関係について、「察する」「場面依存」「配慮」「心配り」「気配り」「心遣い」「気遣い」といった表現で論じられてきたが、こういった日本文化に特徴的だといわれる様々なところで指摘されてきた概念というか「たしなみ」なり「わきまえ」こそが日本人の集団としての行動を規制しているのであり、日本語理解や日本人の日本語使用理解、日本文化理解に欠かせない概念ではないかと考える。

それゆえ日本においては、論理的な道筋をしっかりと立てて相手を説得するというよりも、それに抵抗できないようなある種の「空気」をかもしだす、という何とも掴みどころのない方法によって、相手の行動を方向付けるという手段が取られることが常態化しており、ときには、あえてある種の「空気」を作り出すことで、その社会、集団をある方向へと誘導するということさえ行われることがある。「2. 1」の三橋・さかきの作品のように。

この「空気」の支配を、日本人が人間らしく生きることを阻む要因として、否定的にのみ捉えることに、筆者は反対である。「空気」を読むことで、対立が回避され、調和が保たれ平和が維持されるという肯定的な機能にも目を注ぐべきである。可能性として、地球上の人類のすべてがウチなるグループと考えるイデオロギーが受け入れられる状態が出現さえすれば、ウチのメンバー同士がお互いに察し合い、配慮し合うことで、和が保たれるという可能性につながるのではないか。互いに「空気」を読み合う、つまり自分あっての相手、ではなく、相手あっての自分という日本的価値観によって世界が救われる可能性につながるのである。

筆者が「空気」（というイデオロギー）をこそ輸出すべきだと主張する根拠はここにある。日本が「空気」の概念を輸出するということは、日本あるいは日本人を国際化すべきだと主張しているのではなく、逆に、世界を日本化しようという運動をすることで世界平和につながるという主張をしていることになる。

では具体的にどのような方法でそれが可能になるのか。まず、日本人が日本の外に存在する論理で、ことばで、日本的ではない人々に対して説得するコミュニケーション力を身につける必要がある。そのコミュニケーション力を用いて、日本人的な人間関係の作り方、「空気を読む」意義を説くのである。これが我々のミッションである。発信すべき内容である。人と人との間に、オレがオレがと主張することで生まれる「対立」ではなく、お互いに察しあい、配慮しあう「空気」が育てば、当面の直接的な対立が回避できる可能性につながる。このことこそが、日本人がこの狭い列島のなかで袖をすり合わせながら育んできた知恵で

あり、日本文化であるからである。

筆者の「国際化」の定義は「[21世紀の法政大学]審議会」で提唱し、「[明日の法政を創る]審議会」でも継承されているアイデアである。②

これに関連して、最後に「内なる国際化」について一言ふれておきたい。

「内なる国際化」とは、国際化が、日本人が外国に出かけて現地の外国人と交流することによってだけでなく、来日する外国人との交流を通じても達成できるはずだ、というアイデアである。たしかに最近では外国人と接触・交流することが以前より日常的になってきたことにより、特に若い世代の場合、異文化に対する違和感がなくなりつつあるので、ことさら異文化を強調する必要はなくなりつつあるのではないかという議論がなされることがある。しかし、日本人全員がみんなで仲良く国際化、が国際化であるとするれば、全員が少し同じ方向にずれただけであって、国際化とはほど遠いということに気づいてない人が多い。

日本人の中に存在するはずの、国際化などしなくてもいい、という、国際化を提唱している人々とは異質な存在をも認めるといのが真の国際化ではないのか。あいつは国際化してない、英語が話せないといってコミュニティから排除するのは、そもそも「国際化的行為」ではない。その国際化していない（国際的になっていない、国際化されていない）土壌が異質な存在を排除しようという心理、いわば「いじめ」の土壌なのである。厳然として「いじめ」が存在すること自体が、国際化が依然としてまったく進んでいないことの証左である。

明治新政府が誕生したときに、「天皇の赤子である臣民は「正しく美しい日本語」を話すべきだ」というイデオロギーによって、いかに日本語が、標準語というコンセプトによって歪められたか。21世紀になるのに、日本（人）は英語を話せるようになるべきだというイデオロギーによって、当時と同じ過ちを繰り返そうとしているのである。③

〔注〕

- ① 現代哲学事典の中の市川浩氏による「自我 I」の解説には以下のような記述がある（山崎正一・市川浩編（1970）『現代哲学事典』 p.267）。

ブーバーによれば、「我それ自体というものは存在しない。存在するのは、我-汝における我か、我-それにおける我のみである」。私は汝とのかかわりにおいて真に我となる。「我-汝」は我と汝とがむすびつくことによって生じたのではなく、我に先立って存在する。これに反して「我-それ」は、自己を我として認識することによって、つまり我の分離のあと、我とそれとが連結することによってはじめて成立したのであり、このような我が、孤立した主観としての自我のはじまりである。

また同書、塚本明子氏による「我と汝」の解説には以下のような記述がある（p.670）。

マルティン・ブーバーは、この「われ」を対象化のはたらき以前にひき戻し、「われ-それ」という主体-客体関係とは別に、「われ-なんじ」という関係におけるわれ、なんじあってのわれ、われあってのなんじという、根源的な関係で捉えた。

ここにあるように、ブーバーの「我-汝」論は一見日本語の「私-あなた」論に通じるようなところがある。ブーバーの『我と汝』や『対話的原理』にみられる「我-汝」論と、ここで扱っているような日本語の「私-あなた」論については、稿を改めて論じたい。

- ② 「『明日の法政を創る』審議会」の報告書の冒頭には、

「21世紀の法政大学審議会」の答申で、国際化とは、「①異質なものと出会い、②その異質なものを認め、③認めた自分を再発見する、という過程を繰り返していくもの」とされている。当作業部会は基本的に、その理念を継承する。また、ここでいう「法政大学の国際化」とは、法政大学が法政大学自身を国際化することであり、また法政大学が学生および教職員を国際化することでもあり、さらに、学生および教職員が自らを国際化することでもある。

と書かれているが、これが筆者が提唱している「国際化」の定義である。後半（「また」以降）はわかりにくいかもしれないが、「国際化する」が一般には自動詞として使用されており、「(〇〇が)国際的になる」話として展開されることが多いことに対する異議申し立てで、他動詞として「(〇〇が〇〇を)国際的にする」話をしなければならないことを示唆したものである。このアイデアの初出は江村(1992)である。

- ③ 世界でも珍しい、「正しく美しい標準語」をつくりだした日本人が、今度は英語で日本人度をはかろうとしているということの問題点については、稿を改めたい。

文 献

《新聞類》

『朝日新聞』2013年4月29日版

《書籍類》

会田雄次(1972)『日本人の意識構造：風土・歴史・社会』講談社現代新書

池上嘉彦(1984)『記号論への招待』岩波新書

池田信夫(2013)『「空気」の構造』白水社

井沢元彦(1995)『言霊：なぜ日本に、本当の自由がないのか』祥伝社、ノン・ポシェット

井沢元彦(2012)『なぜ日本人は、最悪の事態を想定できないのか：新・言霊論』祥伝社、祥伝社新書

伊丹敬之(2009)『デジタル人本主義への道 経営の未来を見誤るな』日経ビジネス文庫、日本経済新聞出版社

ウォルフレン、カレル・ヴァン／篠原勝訳(1994)『人間を幸福にしない日本人というシステム』毎日新聞社

- 榎本博明 (2011) 『「上から目線」の構造』 日本経済新聞出版社、日経プレミアシリーズ 139
- 榎本博明 (2012) 『「すみません」の国』 日本経済新聞出版社、日経プレミアシリーズ 157
- 江村裕文 (1992) 「法政大学における留学生教育 - 大学における留学生の位置づけと将来への展望」『留学交流』 1992.1 月号、pp.18-21
- 江村裕文 (2002) 「文の文法性と容認度 - ドメニコ・ラガナ氏の『これは日本語か』をめぐって」『異文化』 3、法政大学国際文化学部、pp.263-285
- 江村裕文 (2016) 「「空気」に関する論考 I」『異文化』 17、法政大学国際文化学部、pp.5-23
- 小池清次 (1994) 『日本語はどんな言語か』 ちくま新書
- 古賀茂明 (2011) 『官僚の責任』 PHP 新書
- ジャック・ハルベン (1979) 『ユダヤ人の頭日本人の頭：放浪民族と孤立民族の発想と論理』 青春出版社
- 鈴木孝夫 (2009) 『日本語教のすすめ』 新潮新書
- 田原総一郎 (2011) 『日清・日露・太平洋戦争誰も書かなかった日本の戦争』 ポプラ社
- 戸部良一他 (1984) 『失敗の本質：日本軍の組織論的研究』 ダイヤモンド社
- 直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき：異文化間コミュニケーション』 大修館書店
- 三橋貴明・さかき漣 (2012) 『真冬の向日葵』 海竜社
- 山崎正一・市川浩編 (1970) 『現代哲学事典』 講談社、講談社現代新書
- 冷泉彰彦 (2006) 『「関係の空気」「場の空気』 講談社現代新書